

ゲーテの『魔王』に乗せて

黒色大聖堂

深森の出会い

この暗くて、うっそうとした森を前にして私は大きなため息をついた。

なぜ、あんなにも大金をもらえたのかが分かったからだ。

これだけ草木が茂っていても馬車は使えない。ここからは徒歩でいくほかあるまい。

この地の領主に届けてほしいと依頼を受けたときは、そう大きくもない積荷だし相手は仮にも領主なのだから、届けたら届けたで他に何かもらえる、おいしい仕事だと内心は思っていたのだが、これなら貰いすぎということはないだろう。やはり世の中、甘い話には気をつけた方がよいと言うことか。

私は積荷を背中に担ぐと森の中にあるという古城へと歩き出した。無論、この森を通らなければならぬわけだが。

気は進まなかったが前金の分だけであれだけ、もらっては届けないわけにもいかない。片手にランプを下げながら、茂みと分け入った。

今日はきれいな月夜だったが、森に入ってしまうと背の高い木に囲まれてそれも良くは見えない。私はとっとと荷物を届けて楽になりたかった。届けてしまえばあの金は手に入るのだから。

道はあってないようなものだった。とにかく茂みを掻き分け、掻き分け進む。

どれほど歩いたのだろうか。やがて森も少しは開けてきたようだ。だいぶ歩きやすくなってきた。

このまま早く、こんな森を抜けてしまおうと思ったときだった。

脇のほうから何やら気配を感じた。私は不思議に思い、そちらの方に視線をやった。

その瞬間、飛び上がる思いだった。気味の悪い獣のような奴がこちらを、見つめている。距離は、それなりにあるがそれは問題ではない。なぜなら複数いたからだ。その怪しい影たちが一斉に動き出した。

あまりの恐怖に私は持っていたランプを投げつけると無我夢中で走った。

心臓は凍りついたままだが、同時に早鐘を打つようだった。恐怖で冷えきった肝が、緊張で激しく脈うっているのだ。とにかく道など無いのだが、あの化けもの連中から少しでも遠くへ逃げ延びなければならない。私はパニックに陥っていた。まさかこんな恐ろしい目にあうとは！

途中、何度もつまずいたりしたが、振り向くことはなかった。ただただ前だけを向いて走り続け、いつの間にか背中が軽くなったと思ったら、荷物がなくなっていた。そんなことは今では、どうでもよくなっていた。

私はもうメチャクチャに走り回った。とにかくこんな森から、すぐにでも逃げださなければと。どこをどう走ったのかわからず、気がつくとも目の前には崖がそびえ立っていた。しまったと思いながら引き返すことにした。また森に戻るのかと思うと、うんざりしたのだが、崖に突き当たってはどうしようもない。しかし、すぐに今きた道へとは戻る気になれず、崖からの景色を眺めよ

うと考えた。それで心を落ち着けようという思惑もあったが、何より、あの、うっとおしい森の景色とは違って開けた眼前の眺望が美しかったからだ。空には少し雲が出ていて、それが月にかかっている。その雲が、ゆっくりと流れていく。あまりにも非日常的な目に遭遇したので、この景色を見ていると心が安らいだ。それには現実逃避をしたいという深層心理もあったのかもしれないが、とにかく平静を取り戻そうとしていたのだ。

恐怖の遭遇

するとその時、風が草木を揺らした。かさかさとして樹木が揺れている。夜風は冷たかったが、これで頭がはっきりとした。だが、次の瞬間に何かが変わったと思った。風だけが吹いているのではない。かさかさという音に混じって別な音がする。その音はがさがさというような、もっと騒がしいたちの音だ。私は後ろに目をやった。何か近付いてくる気配がする。額からは汗が噴き出してくる。その何ものかは、しだいに、こちらへと近づいてくるようである。

草木を掻き分けるような音が止んだ。何やら気配がする。息を殺しているらしかった。次の瞬間、それは眼前に躍り出た。先ほど遭遇したのと同じ化け物だった。今度は一体だけだが、あの醜悪な姿で、こちらを見つめている。二本足で立ち、鋭い爪で威嚇をしている。瞳は黄色く濁っており、黄身が悪い。吐く息は死臭のようで臭くてたまらない。食べたものを思わず吐き出してしまいそうだ。先ほどとは違って、その姿を間近で見ると、より一層、嫌悪感が増してくる。獣のようだが果たして二本足で立つだろうか。熊ならそれもあるだろうが、目の前の化け物は、どちらかと言えば狼のような姿である。

その時、雄叫びを化け物があげた。鋭いキバが見えた。こんなので噛み付かれたら頭蓋骨など粉々に割れてしまうだろう。狼ではなくもはや猛獣である。二足歩行の猛獣だ。そいつは嫌らしく、じりじりと私に詰め寄ってくる。背後は崖なので逃げ場はどこにもない。一か八か飛び掛るしかないのだろうが、あんなキバを見せられたら、そんな勇氣はどこかに飛んでいった。もう終わりだと思って私は、頭を抱え込みながらしゃがみこんで目を閉じた。頭を抱えたのは無意識に少しでも、身体を庇おうと思ったからだろう。実際、震えていた。こんなところで化け物に命を奪われるなんて、数日前には思っても見なかった。何という悲惨な末路だろう。もう諦めに似た心境でいた。

しかし、私は獣の絶叫で目を再び開くこととなった。それは咆哮などではなかった。断末魔のような、唸り声だったのである。恐る恐る私は目を開いた。すると矢のような速さで何かが、崖から滑り落ちていった。私は驚いてその行方を眺めた。それは先ほどの化け物らしかった。何か傷ついているようにも見えたが、険しい崖に体を打ちすえて傷をこさえてしまったのかもしれない。とにかく目で追おうとしても、よく捉えきれないまま谷底へと消えていった。

私は次の瞬間に、また恐怖にさいなまれた。今、あの化け物が谷底へと転落していったということは、何か起きたということだ。私は後ろを振り返るのが心底怖かった。しかし、いまや私の神経は過敏と言うほどに研ぎ澄まされおり、背後に何ものかの気配を感じていたのである。前は深い渓谷である、ここは振り向くしかない。喉がからからに乾いていることが、はっきりとわかった。生唾を飲み込みながら恐る恐る振り返る。そこには、もっと凄しい化け物がいるのに違いないと思いながら私は一気にぱっと後ろを振り返った。そしてまた息を飲んだ。

月夜の出会い

そこには少年がにこやかに立っていたのだ。はっきり言って男の私が言うのも変な話なのだが、非常に美しい。息を飲んだのは、そのことを含めてだ。何故だか分からないが少年は執事服のような格好だった。

少年のようだが、少女のようでもある。つまり中性的なのだ。

「大丈夫ですか？」

半ば放心状態の私は、そう問いかけられた。その声はどうやら少年である。私は夢の中にいるかのような心地だった。口が利けない。今夜は経現実的なことが余りにも多い。再三、遭遇した化け物に追い掛け回されたと思えば、今度は、美しい少年が眼前に立っている。あまりのことに、夢でも見ているのではないかとさえ思えてくる。

大丈夫ですかと、もう一度、少年が尋ねた。

「ああ」

と本当は、大丈夫でも何でもないので私は答えた。

こんなあどけない少年の方が落ち着いていて私の方が動揺しているなんて、ひどく恥ずかしかった。しかし、この少年が神秘的な雰囲気をもたえた存在であれば、それも仕方があるまい。そう思わせるだけのオーラを感じた。

「あの化け物から救ってくれたのは君なのか？」

少しの平静を取り戻したので私は聞いてみた。

「はい。」

「一体、君のような少年がどうやって？」

「ナイフを、眉間に投げつけてやったんですよ。僕は領主様のもとで、その訓練をしているので」

少年はそう言うと無邪気に笑った。その表情もまた美しかった。

話が本当だとすれば、どうやら化物が負っていた傷は、この少年がつけたものらしい。

「実はその領主様に届けてほしいと頼まれて私は、ここまでやってきたんだ」

「そうだったんですか。では案内しますよ」

少年がそう言ったので私は、気まずくなった。

「実はだね。さっき、あの化物たちに襲われて荷物を奪われてしまったんだよ」

本当は荷物を放り出して逃げ出したとは言えなかった。しかし、あの状況ではしかたがないことだし、おそらくあの連中も荷物に群がっているかもしれない。どちらにせよ、そう違いはあるまい。

「ああ。申し送れました。僕は使用人のコウと言います」

少年は名乗った。

「ジョナサン・ハーカーだ。よろしく」

これだけの美貌を持ちながら腕も立つ。私はこの少年が実に頼もしかった。

導かれるままに

私はコウと名乗った少年の後をついて歩いた。不思議なことに彼はこの暗い森で明かりを必要としなかった。なんでも夜目が利くという。一時はどうなるかと思ったが、この美景のガイドにめぐり合ったのは幸運だ。不安を隠すために喋りながら歩こうと思った。

「この森はしょっちゅう、あんな化物が出るのかね？」

「いえ。でも狼や野犬が襲ってくることはありますよ」

それを聞いて大金を積まれても二度と運ぶものかと心の中で舌打ちをした。

「君はその領主様という人に使えて長いのかい？」

「はい。そうですね、幼い時からなので、結構な年数になるかと思えます」

「そいつは大変だ。」

「いえ慣れてますから。それに外の世界より城の中は快適ですよ」

「私もそこに早く着たいものだ」

「城に着いたら主が来るまでに食事の用意をしますよ。それに上質な赤ワインも容易してありますので、是非とも飲んでいてください」

「そうか。それは助かる」

「せっくなので食事が済んだら、一晩泊まっていかれては？」

「本当かね。そこまでしてもらおうと荷物を奪われて、命まで助けられたのに何から何まで申し訳ないな」

「いえ。荷物は気にしないでください。ちゃんと届く予定ですから」

そう言うなり、一瞬笑った少年を見て不思議な気持ちになった。ちゃんと届くとはどういうことか。そもそも何が届くのだろう。荷物は森に置いてきたのだ。この少年が後で拾いにでも行くというのか。分からない。

「すみません。少しだけ静かにしていただけますか」

私は少年の気でも悪くしたのかと、思い黙り込んだ。

だが、どうやらそうではないらしい。私には嫌な予感が感じられた。

少年が歩みを止めて立ち止まった。私もそれにならう。

あたりから血なまぐさい匂いが漂う。この匂いを私は知っている。血と死肉の混じったような悪臭だ。あの臭いだった。

例の怪物が群れで近づいてくるのが分かる。最初に出会ったときよりも多い。ここまで来てまた出くわすなんて。さすがにこの数は、技に秀でたこの少年がいたところで太刀打ちできないだろう。こんなところで食い殺されるなんて。私は地面に腰をついてしまった。

「そのまま目をつぶっててもらえますか」

少年が語りかけた。その目を見て驚愕した。色彩が真っ赤に染まっている。これは充血なんてものじゃない。血のように紅い。この目で見つめられたら逆らうことなど出来なかった。私は目を閉じて恐怖で震えていた。怪物たちの気配はまだしている。どれほどその場に座りつくしていた

だろうか

「もう大丈夫ですから」

その声に目を開いた。目の前には優しい笑顔を少年が立っていた。

「さあ、もうすぐですよ」

微笑みながら差し出された手を私は握って、ゆっくりと立ち上がった。

いつの間にか瞳は元通りに戻っていた。この大変、美しい少年にまたもや私は魅了されていた。この子を召抱えている領主とやらは、かなりの目利きらしい。こちらで引き取りたいぐらいだ。それからは、ただ黙々と歩いた。言われたほどすぐには、森は終わらなかったが、それでも良かった。あれだけの目に遭いながら、もっと一緒にいたいとさえ思いはじめていたからだ。やがて先頭を歩いていた少年が立ち止まった。まさかまた、あの怪物度もが現れたのではないかと私は冷や汗をかいたのだが、違った。この薄気味の悪い森ともいよいよ、おさらばする時がきたのだった。

「この先を抜けると、森の出口ですよ。城まではこのまま、まっすぐ進むと着きますから」彼の一言で、私はほっとした。そして彼が指差すほうへと先に進む。本当はこのまま城までへと走り出したかったのだが、今までのことに感謝して少年に

「ここまでありがとう。色々助かったよ」

そう言って私が後ろを振り返えると・・・・・・・・

背後には辺り一面、霧が立ち込めており、少年の姿はそこには無かった。

文字通り、霧の様に消えていた。あるいは霧こそが彼そのものなのではないのかとさえ思った。私は、ただただ啞然としたまま、この不思議で怪奇な森を後にしたのだった。

トランシルヴァニアとよばれる彼の土地は「森の向こう」という意味である。

その森の奥には、ひっそりと古城が立っている。

その薄明かりに照らされた真紅のビロードが敷き詰められた一室に主が佇んでいた。

「今宵は愉快的な夜だったな。『荷物は』、ちゃんと予定通りやって来た」

執事が着る衣装を身にまとい、一言だけ呟くと、うっすらと笑いを浮かべた。

その口元から鋭い犬歯が光った。眼光は鋭く、あの鮮血のような真っ赤な瞳が輝いた。
蓄音機からシューベルトの『魔王』が静かに流れている。